

私の夫の工

「言語活動」を
充実させるために

前 津山市立津山西中学校 主幹教諭
現 鏡野町立鏡野中学校
教頭 黒瀬 愛



1 はじめに

令和5年度、前任校で公開授業をする機会をいただいた。公開するまでの過程、そして 当日授業を見ていただいた方々から多くのフィードバックを得たことは、私の教員人生の中で財産となる貴重な経験となった。公開授業を通して学んだことや、普段継続して取り組んでいたことを紹介したい。

2 単元計画

題材「身近なトピックを通して、調査や発表の効果的なやり方について考える」

単元目標「ALTの家族に津山の魅力を知ってもらうために、自分が調べた津山の魅力について、

事実や自分の考え、気持ちなどを簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができる」

① 単元の目標設定

単元目標を設定する上で大切にしたことは、どんな「場面・状況」で、「誰に」対して「何をするのか」を明確にすること。しかし、黒板に目標を提示するだけでは、生徒が「自分事」として捉えたり、具体的にどんなことをしていくのか想像できないと思う、ALTに単元の目標や計画を伝えた上で、フィリピンに住む家族の自己紹介動画を送ってもらった。動画の中では、家の近くを通るバイクの音が入っていたり、クリスマスツリーを飾った部屋の様子を見たりする

ことができ、ALTの家族やフィリピンを身近に感じることができたようだ。

② 単元を見通す

単元の最終ゴールに向けて、どんな活動をどのタイミングで入れるのか、単元を見通して計画を立てる。ただ生徒の反応により、その都度計画を修正することも多々ある。

今回は、最初にALTの家族の自己紹介を聞いた後、津山を紹介するにあたってどんなことに興味



フィリピンから送られた自己紹介動画

があるのか、もっと家族の情報がほしい、という声が生徒からあがったため、生徒が考えた質問をリストアップしてフィリピンに送った。そして、その質問に対する動画がまた送られてきた。実際に自分たちの質問に答えてくれているので、どの生徒も一生懸命に英語を聞き取ろうとする姿が見られた。ICTは教室と世界を瞬時につなげるツールであり、必然的に英語を使用する場面を作り出してくれることを改めて実感した。

また、自分たちがあまりにも津

Questions to “Nami” and “Ran”

- Q1. What allergy do you have?
- Q2. Which do you like, outdoor activities or indoor ones?
- Q3. Do you like seeing animals?
- Q4. Do you like anime?
- Q5. Do you eat raw fish?
- Q6. Tsuyama is famous for “organ meat”. Do you want to try it?
- Q7. We learned about the Philippines food like Halo-halo last year. Do you want to try Japanese parfait?

【ALTの家族へ送った質問リストの一部】

山のことにについて知らないことに気づき、津山の情報を集める時間が欲しいとリクエストがあった。ネットで調べる生徒やクラスメートにフォームでアンケートをとる生徒、家族に相談する生徒もいた。生徒が単元の最初に「面白そうだな」「やってみよう」と思ってくれると、あとは生徒自らゴールに向かい、「どうやって?」「何を伝える?」など「How」と「What」を考えながら自主的にそれぞれのやり方で進めていくことができると感じた。

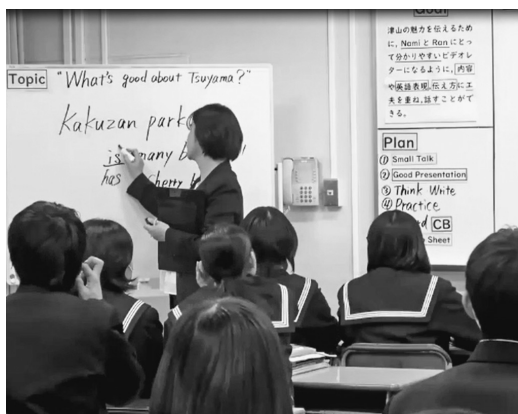
③ 言語活動を繰り返す

生徒が二人一組のペアで言語活動をしている間、「言語面」「内容面」について全体で共有すべきことは何かを見取りながら机間巡視をした。「このペアはここで困っているな」「この文法ミスが多いな」「このペアの会話の広げ方を全体で共有したいな」というものを観察してメモを取っておき、クラス全体に返していく。生徒は共有したことをもとに自分の表現を修正し、別の生徒とペアになって活動を繰り返す。そうすることで、

「言語面」「内容面」ともに洗練した表現になっていった。

④ 振り返り

言語活動を繰り返す中で、「新たに学んだこと、できるようになったこと」「工夫したこと」「うまく表現できなかったこと」等、生徒が授業の最後に記録をとり、次の授業に生かすようにした。



机間巡視後に全体共有

3 一単位の授業

- ① ゴールの設定
- ② 帯活動（スモールトーク・ビング・写真描写等）
- ③ メインの活動

④ 振り返り

当然ながら、これら全ての活動が単元目標を達成するためのものである。

一単位の授業の中では、教科書を使用することが多いのだが、教科書も毎回同じ使い方では生徒は飽きてしまう。教科書の各ページでどんな資質能力を育てることができるのか、育てるためにはどのように教科書を有効活用するのかを考えた。



互いの発表を録画し、アドバイスし合う

4 家庭学習

授業の中でしたいこと、しなければならぬことは多い。そのため、「家でできることは家でやってくる」ことを基本とした。例えば「音読テスト」。評価規準をあらかじめ生徒に提示し、教科書のQRコードをもとに、普段から音読練習は家庭で行う。そして、指定された教科書のページを読み、期限内に音読している動画を提出させた。これにより、授業で言語活動をする時間をより多く確保することができた。

5 おわりに

社会の変化に伴い、学校現場における英語教育の環境は目まぐるしく変化している。自動翻訳機や生成AI、英語学習に役立つアプリなどが普及し、生徒は家で英語を習得できる時代である。そんな時代の中、なぜ学校でクラスメートとともに英語を学ぶのか、学校でしか学べないことは何かを考えながら授業を工夫し続けていくことが大切だと考えている。

の夫私工

企業と連携した
造園教育の実践と
スペシャリストの育成

県立興陽高等学校

指導教諭 尾畑 篤司



1 はじめに

本校の造園デザイン科は、県下唯一の造園に関する学科として、庭園や公園などの緑地空間のデザインや施工、管理を行うための専門知識と技術を学んでいる。その教育内容の特殊性から、造園デザイン科長として、造園業界との連携したより実践的な教育に力を入れている。

連携することで、それぞれの情報やノウハウを有効に活用できるようになり、本校においても造園業界のプロの方々から様々な場面で技術指導を受けることが可能となった。

2 造園業界との連携

令和5年12月、本校と岡山県造園緑地組合連合会、日本造園組合連合会（岡山県支部）の三者が、造園業界の振興と若手人材の育成を目的に連携・協力に関する包括協定を締結した。学校と産業界が



包括連携協定締結式の様子

① 造園技能検定（国家資格）での連携

岡山県の造園技能検定は、本校を会場として実施されている。本校の敷地内には、造園業界の協力のもと、検定会場が整備されている。この会場は練習場所としても使うことができるため、本校生徒は本番さながらの環境で練習に励むことができる。また、生徒より上の級を受検する若手職人が練習する姿を見て学ぶだけでなく、彼らを指導する経験豊富な指導者から、技術指導もいただいている。造園業界の方との学びを通じた触れ合いは、生徒がさらなる技術の向上を求めて各種競技会にエントリーして技術を磨いたり、進路について関連企業に就職を考えたりするきっかけとなっている。

② 岡山後楽園展示庭園での連携

本校は平成27年から岡山後楽園での展示庭園の作庭に参加している。令和6年からは、日本造園組合連合会（岡山県支部）青年部と連携し、展示庭園を共同作庭することにし、作庭を通して若手職人による技術指導が受けられる講習

会のスタイルに変更した。これにより、生徒がプロの技を間近で見ることができ、さらに作庭に対する職人の思いや熱量も感じることができるようになっている。また、作庭した庭を一般市民の方や観光客の方々に見ていただけることも、自信と責任を持って取り組む姿勢につながっている。

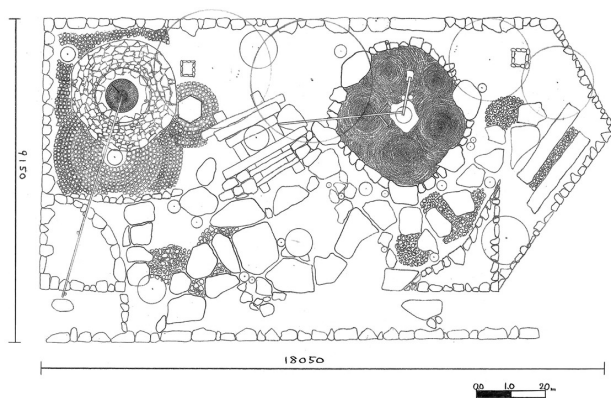
3 卒業庭園制作の取組

2年次までに身に付けた知識や技術をもとに、3年次では学びの集大成となる「課題研究」において卒業庭園制作に取り組む。令和6年度は、本校の玄関脇の敷地（奥行き約9m、幅18m）に、庭園施工管理類型22名の生徒が8カ月をかけて作庭に取り組んだ。

① 庭園デザインの設計

庭園の中心に滝の石組みを取り入れることを設定条件として、自由な発想で生徒に庭園のデザインを考えさせた。生徒は班長を中心にアイデアを出し合い、検討を重ね、デザイン性や施工上の課題を様々な角度から一つ一つ確認し、

庭園デザイン案



完成したデザイン案をもとに工程表に従って施工を行った。施工内容としては「花壇の設置や流れに架ける橋の設置」「水琴窟すいきんくつ」「蹲つく踞ばい」「鹿おどしの添景物てんけいぶつ」などがあげられる。

今回の施工にあたり、授業の導入時に毎回、ツールボックスミーティングを取り入れた。ツールボックスミーティングとは、その日

作業を行うメンバーで施工内容や危険予知、安全対策について確認するミーティングであるが、本実践では作業工程などの目標設定についても確認させ、見通しをもって作業の調整ができるようにした。施工においては、造園空間として設計の意図を表現できているかが重要である。自然素材の材料は大きさや形、表情がそれぞれ違っており同じ形状のものがいないため、生徒たちは、常にどのように配置するかを考え、素材を活かす確かな技能（表現力）を高めた。上手くいかない場合は、そのたびに班員で話し合い、問題解決の方法を導き出した。このように主体的で対話的な授業展開ができたことにより、生徒はこれまで身に付けた知識、技術を活用し、自分たちが思い描いた大庭園の作庭をやり遂げることができたと感じている。



施工の様子

課題研究施工レポート No.	
造園デザイン科 3年 () 番 氏名 ()	
日 期 () 月 () 日 () 曜日 天候 () () 時 () 分 ~ () 時 () 分	
① 本日の目標 _____	
② 施工内容（施工項目を挙げて記入しなさい） ・ _____ ・ _____ ・ _____ ・ _____ ・ _____	
③ 危険予知・安全対策について（施工項目を挙げて記入しなさい） ・ _____ ・ _____ ・ _____	
④ 使用した施工器具 	
⑤ 作業状況の現状を平面図とスケッチ図で描きなさい。 平面図 スケッチ図	

※本日の施工（表現したもの）に対して、どのような考え方、どのような方法を選択してアプローチしたのか？
 （施工方法での成功や失敗などをまとめてほしい。）

⑦ 実習メモ

⑧ 次回図の集約（施工）での目標

本日の施工実習を振り返り 自己評価 A・B・C
 理由 _____

※施工の場面で、図面と実力・知識に相違・落差をもっての**取返**することができたか！

ミーティングから授業まとめに使用する施工レポート

近年、卒業後に専門分野の進路を選択する生徒の減少や教える側の教員の伝統的な造園技法の継承など様々な課題がある。しかし、造園業界と包括協定を締結したこれにより、造園業界との関係が深まり、今後の造園教育の方向性や人材育成についても意見を交わす機会が多くなった。これからも造園業界との協働体制を強固なものにしながら、造園の伝統の技と心を身に付け、即戦力として地域社会に貢献できるスペシャリストの育成を目指していきたい。

4
おわりに



完成作品